

## 飛鳥・奈良と「汎ユーラシアのイラン文化」

青木健

## 19 国際シンポジウム「ペルセポリスから敦煌へ」

2019年11月の敦煌

今号では、2017年8月の敦煌訪問から少し離れて、2019年11月に敦煌で開催された敦煌研究院主催のシンポジウム「從波斯波利斯到敦煌」(「ペルセポリスから敦煌へ」)に於ける挿話を挟みたい。この小文の中の時系列では、目下敦煌に滞在中であるし、同じ敦煌での出来事として、今号で論じるに相応しいエピソードではないかと思うからである。

このシンポジウムは、中国とイランの文化交流の様相を、主に中国学者とイラン学者、及び若干のヨーロッパ人学者と日本人学者のディスカッションによって明らかにしようとの意図の下に開催されたものである。少なくとも、招待状にはそう書いてあった。多分、習近平政権の一路政策とか、中国とイランの外交的接近とか、経済発展に乗り遅れた甘肅省に於ける観光産業の振興とか、

様々な事情が背後に伏在するのだろうかと思うが。

日本にはシルクロード研究の碩学が多いにも拘らず、古代ペルシアに関わる「ペルセポリス」について喋ると云う意味で、筆者がお誘いを頂いたようである。因みに、中国人たちは、日本の学界で誰がどんな研究をしているかについて、こちらが思っている以上に詳しい。例えば、2020年8月に筆者が『ペルシア帝国』(講談社現代新書)という小著を上梓させて頂いた際、中国人読者たちから色々と読後感想を頂戴して驚いたものである。中国人が日本語の著作をわざわざamazonで購入して読み耽る時代になったらいい。しかも、その内容は、「ギリシア語とラテン語の区別がついていない」だとか、「古代ペルシア語の読みが甘い」だとか、「ドイツの〇〇教授の著作を参考にしていない」だとか、結構専門的であった。

「これは相当特殊な中国人たちではあるまいか？」とあって、中国人の同僚に確認したところ、中国東北地方では日本語を第一

外国語に指定しているので、日本人が想像しているより遥かに日本語の書籍が読まれているとのことだった。特に、中国東北地方の朝鮮族の人たちは、日本語に堪能と聞いた。多分、そういった方たちが読んで下さっているのだと思って納得していたら、最も専門的な批評を下された方は、広西壮族自治区出身の女性であった。こうなると、読者層は東北地方に限らない。広大な中国大陸には、異才の持ち主があちこちに潜んでいるようである。

## シンポジウムの参加者たち

そんな事情で、筆者は2019年11月に、再び敦煌にお邪魔する機会を得た。期するところは、中華意識の強いイラン人研究者と中国人研究者が、お互いの文化的境界—少なくとも10世紀以前はここが境界だった—たる敦煌の文物を見て、どのような判断を下すか、どのような意見を述べるかの観察である。

イランから来訪予定の研究者の名前は、招待状の段階では4名だったが、実際に姿を見せたのは2名だった。即ち、イラン国立博物館の前館長であるA教授と、その弟子でイラン美術が専門のM女史である。2人とも、筆者とは一面識も無い。こういう場合、同席が予告されている登壇者についてあらかじめ調べていくのが礼儀なのだが、筆者はついつい怠っていた。

而して、前々日の朝、筆者が指定された敦煌の賓館に投宿し、餐厅

で中国語のメニュー表と格闘しながら朝食をオーダーしていた時のこと、この2名もフラリと立ち現れた。周囲には20名ほどの中国人客がいるし、餐厅のおばちゃんも筆者を中国人と認識して中国語の「菜單」を手渡すような状況である。彼方では、中国電視台が普通語でニュースを流している。このイラン人2名が、「菜單」を読み耽っている筆者を日本人発表者だと識別できる可能性は方に一つもあるまいと思っただけで、驚くべし、入り口から真っ直ぐ筆者のテーブルに進んできて、優雅に挨拶するではないか。しかも、その言葉からは、私がキャリアの最初期(2000年)に発表した、今では人さまに見せられないような稚拙な論文のことまで、逐一調べ上げていることが窺えた。

個人的には、「あんなものがイランで出回っているとは」と臍を嘔む思いである。尤も、ここでのポイントは、イラン人研究者たちの完璧な予習振りの方であるが。個人の立ち居振る舞いを国民性にまで還元するのは危険だが、筆者が知る限り、概ねこれがイラン人の社交技術なのである。オリエントの人脈社会を華麗に生き抜いてきたイラン人インテリには、到底対抗できぬと云うのが率直な感想であった。——この後、一切予習してこなかった筆者があたふたして対応したことは言うまでもない。

中国人研究者の方は、いずれも敦煌研究院に所属の研究者である。まことに奇遇だが、そのうちの一人Y教授には、「霞浦摩尼教研討会」(福建省福州市西湖賓館、2016年3月)の席上でお目に掛かった記憶があり、もう一人Z教授とは、「日中平和友好条約締結40周年

記念シルクロード国際シンポジウム…越境する文化の道——敦煌・中央アジア・奈良」（日経ホール（東京）、2018年12月）で対談している。2人とも、筆者が概ね無能であることは熟知しているであろうし、その上で敢えて招待している訳だから、全く問題はない（多分）。

ヨーロッパからは、ドイツ人とイタリア人の古代イラン学者が来訪すると聞いていたものの、出現したのはイタリアのP教授だけだった。こちらは、翌日の餐厅で会ったのだが、流石に中国人客の中にイタリア人が混じっていたら、私の方から気が付いた。これまた陽気で社交的な人物で、社交辞令を山盛りにして提供してくれた。筆者の感覚では、文化の古い土地ほど、お世辞が豊富なような気がする。

何しろ、開口一番が「我々はロベルトの仲ではないか」であった。筆者としては、ロベルトと云う名前の共通の知り合いがいるのかと思つて、あのロベルトさん、このロベルトさんと名前を挙げたが、P教授は頭を振るばかり。困ってしまった、「それは誰ですか？」と尋ねたら、「ロベルト（イタリア語綴りでRoberto）のRoはローマのRo、BerはベルリンのBer、toは東京のtoで、第二次世界大戦の時のイタリア＝ドイツ＝日本枢軸同盟のことだよ」と、ドレミの歌のような種明かしであった。第二次世界大戦直後くらいには、ドイツ人と日本人の間で枢軸同盟が話題にされるケースが多々あったと聞くが、イタリア人が日本人にこう云う話題を振るケースは、いまだ嘗て聞いたことが無かった。——そもそも、ロベルトは英語やドイツ語ではRobertなので、イタリア語綴りを知らなければ通じない冗談

## イラン人学者の発表

敦煌莫高窟でのシンポジウム初日は、イラン人学者の講演であった。P教授とM女史が流暢な英語で発表したのだが、確かに情報量が多く、その分には興味深いものであった。しかし、かなり自己主張の強い内容でもあった。敦煌の壁画を取り上げて、あらゆるところにイラン的要素を発見していくのである。筆者は、美術研究に関しては全くの素人だが、「○○が7つ描かれているが、7はイランの聖数だからここにイランの影響が見られる」とか、「牛はゾロアスター教の聖なる動物だから、牛が描かれたこの部分にはイランの影響が感じられる」といった立論は、やや強引過ぎるのではあるまいか？ この方法論で押し切っていけるとしたら、世界にイラン文化の影響を逃れ得る文物はなくなってしまうだろう。前々日の礼儀正しい社交性と、ややもすると強引なイラン文化中心主義の同居が、大変興味深いコントラストを為していた。

筆者としては、中国人研究者たちと聴衆たちがどう反応するかと期待していたのだが、いずれもにこやかに頷いて聞いているのみで、特段の反論は提出されなかった。筆者は素人ながら、反対の方法は幾らでもあると思つていたので、ちよつと期待外れであった。それなら講演者の一人として筆者自身が何か言おうかと思つたら、隣のP教授が、「イラン人がイラン文化を語ると、得てしてこうなる。彼らの通弊として、思い込んだら絶対に批判を受け付けなくなるから、止めておいた方が良い」とのこと。——筆者は、日本人研究者の通弊

ではあったが。

このあと、P教授は「北朝鮮のミサイル発射は怪しからぬ」と、滔々と持論を語って下さった。この時点での日本人相手の話題としては、まことに時宜に叶つており、古代イラン学などと云う浮世離れた学問をしている割には、最新の国際情勢にまでアンテナを張っている様子が窺えた。——数ヶ月後、実はこのP教授こそ、筆者の最新論文を厳しく査読中だった人物で、この折にこちらの一挙手一投足を細かく見ていたと知った時は、ちよつと裏切られたような気がした。この世の中、油断がならぬ。

なお、この賓館には、シンポジウムの聴衆の方々も大量に宿泊していた。その総数122名。食事時になると、明らかに異邦人と知れるイラン人やイタリア人の方には質問者が群がっているが、日本人である筆者は「どこから来た中国人聴衆の一人」としか認識されなかつた。でも、折角ここまで来たからには、中国人たちと交流せねばと思ひ、何人かに話しかけたところ、地元である甘肅省や陝西省の出身者がおよそ半分。意外なことに、至近距離にある新疆ウイグル自治区からの参加者は確認できず、残りは北京、上海、香港から来訪していた。また、日本語話者は5〜6名で、いずれも陝西省社会科学院の研究員や蘭州大学の大学院生であった。開発が遅れに遅れた中国西北五省区で、細々ながら日本語学習の灯がともっていることに深い感銘を受けた。この一隅を照らす灯を絶やしてはならないと思う。ついでながら、彼女ら（全員女性であった）の話す日本語は、実に折り目正しかった。

として、このアドバイスに羊の如く従順に従った。

## イタリア人学者の素養

このP教授は、ヨーロッパ人研究者の通例として、ギリシア・ラテンの古典語に精通しておられた。彼らの感覚では、ギムナジウムでギリシア・ラテンを勉強して、それでも喰い足らぬから東洋諸語——この場合、古代イラン語や中世ペルシア語——にも手を出してみようと云う順番になるらしい。つまり、西洋古典学の飛び切りの秀才が変わり者が、何を血迷ったか東洋学に流れ込んでくるのである。その結果として手を出した東洋諸語が中国語だったりしたら、ギリシア・ラテンに通じているアドバンテージは皆無だろうが、古代イラン語だったりしたら、途轍もないアドバンテージとなる。古代イラン学に関しては、西洋古典学から出発したヨーロッパ人学者の方に一日の長があるなど思つて、P教授のお話を伺っていた。

もう一つの素養として、このイタリア人学者は恐ろしく音感が良かった。初めての中国訪問だそうだが、到着三日目にして、「この中国人とあの中国人は声調が違う。多分、出身地が別なのだろう」と言つて、質問に来る中国人参加者をグループ分けして遊んでいた。筆者も気になったので、一つ覚えの如く「你是哪里的？」を連発して聞いて回っていたのだが、概ねこのイタリア人学者によるグループ分けは正しかった。幼少期からオペラを習っている功徳であろうか。

## 中国人学者の発表

翌日の敦煌は、沙漠の中に雪が降っていた。敦煌は飛天で有名だが、飛天の代わりに雪が舞っていたのである。急激に気温が下がり、わざわざ香港からやってきた聴衆が寒そうにしている。因みに、ここ甘肅省では、台湾人や香港人は本当に人気が無い。地元の人によると、外国企業は中国人に対する賄賂の渡し方を知らないから、比較的ルールに則した経営をするらしいが、台湾企業や香港企業はそのあたりの機微を熟知しているのだから、却って賄賂（として理解されるもの）を乱発して、暴利を貪るのだと聞いた。時恰も香港民主化運動に関する報道が連日テレビを賑わしていたのだが、敦煌では誰一人として香港人に同情を示していない。逆に、抗議運動の画面をスマホで示しながら、「こいつら阿呆だな」などとのたまっている。

——日本人たる筆者に同調を求められても、どちらに味方する訳にもいかず、対応に窮するのだが。

筆者としては、この日こそ、中国人研究者の無意識の中華思想に即した反論が聞けるものと、大いに期待していた。敦煌と云う中国文化とイラン文化の接壊地帯にあって、何がイラン文化で何が中国文化で、両者の接触によって何が生まれたか？ 昨日のイラン人研究者の発表を聞いて、中国人研究者にも言い分があるに違いない。両者の摺り合わせによって、学問は発展していくだろう。

だが、事態は筆者の想像を大きく超える方向に転がっていった。昨日は、英語から中国語への同時通訳が付いていたので、中国人

なく「読んだ」のは、初めての経験である。

業を煮やしたP教授は、この日の講演が時間オーバーになった頃を見計らって、「中国語で『止める』は何と言うんだ？」と尋ねてきた。「おそらく『停止(テイジンジー)』でしょう」と答えると、3秒後にはこれを連発して、「聴衆を交えての講演はこれくらいにして、専門家同士のラウンドテーブルにすべきだ」と英語で提案し始めた。多弁なイタリア人らしく、今日一日、余程喋りたかったのだろうと思われたが、残念ながら司会に却下されていた。

## まとめ

P教授と筆者の発表は、本稿の主題とは直接の関係はないので割愛する。また、普段は一般公開していないソグド関連の石窟7点も特別公開して頂いたのだが、その感想についても他日を期することにする。

結局、このシンポジウムでは、学問的に噛み合うディスカッションには最後まで至らなかった。筆者の理解に従えば、これはこれで中国側が壮大な中華思想を見せ付けたと言えるだろう。イラン人学者の中華思想は、敦煌の文物の逐一をイラン文化の影響と見做すもので、反論可能といえば反論可能だった。しかし、中国の中華思想は、礼儀正しく相手の主張を聞いてるかに見えて、正に問答無用であった。なにしろ、中国語を解さない限り、反論さえ出来ない——どこるか、

聴衆もヘッドフォン越しにイラン人研究者の論旨は理解できた筈である。しかし、今日はその同時通訳が影も形も見当たらない。何かの都合で遅れているのかと思ったら、まるで何の問題も無いかのようにY教授が登壇なさり、恐ろしいことにそのまま中国語で講演を始められた。どうやら、このシンポジウムの主催者は、参加者全員が中国語を理解できるとの暗黙の前提に立っているようである。

確かに中国語は国連が規定する公用語ではあるが、イラン人、イタリア人、ドイツ人（不在だったが）、日本人などが中国語を理解する確率はかなり低いだろう。しかし、中国側から見れば、中国を訪問する以上、中国語を解して当然であるらしかった。そう言えば、指定された賓館でも、英語の表記が一切無く、フロントも英語を話さずで、筆者も初日に朝食をオーダーするのに難渋した。日本人は漢字が読めるからまだ良いとして、イラン人とイタリア人は一体どうやってチェックインしたのか、筆者としては訝しく思っていたところであった。

こうして、中国人研究者が1人3時間ずつ費やして何かを主張しているのだが、その内容がこちらには全く伝わらないと云う異常事態に直面した。P教授が隣でしきりに筆者を突っついて、「あれは何を喋っているのか？」と尋ねてくるが、残念ながら筆者にも分からない。そもそもヨーロッパの隣国同士のケースを想定されては困るのであって、一般的な日本人が中国語を聴いて理解すると思う方が無理なのである。スクリーン画面を見ながら、漢字を理解するのが関の山であった。これだけ長時間の講演を、「聴く」のでは

そもそも相手が何を言っているのかさえ分からないのである。

尤も、帰国後に中国人の同僚に尋ねたところ、別の解釈も可能であった。即ち、中国西北五省区は外国人に慣れておらず、この地域だけは政府の規制も厳しく、万事対応が鈍重に流れる傾向があるとのこと。東南沿海部の状況だけを見た外国人が、「中国人は商売が上手い」とか「中国人は機を見るに敏だ」と捉えると大局を誤るのであって、実際にはそうでない中国人の方が遥かに多いらしい。その「そうでない中国人」の代表格が中国西北五省区の人々であって、単に国際シンポジウムの運営に不慣れで、結果的に「中華思想を見せ付ける」ことになったのだろう——との意見だった。

筆者としては、翌年の2020年11月に敦煌で再度のシンポジウムが開催予定と聴いていたので、その場でこそこの説の真偽を確認しようと考えていた。しかし、残念ながら新型コロナウイルスの感染拡大の影響で、そのようなシンポジウム開催の目処は立たないまま、現在に至っている。



あおき・たけし  
1972(昭和47)年生まれ。東京大学文学部イスラム学科卒業後、同大学大学院人文社会系研究科アジア文化専攻博士課程修了、博士(文学)。現在、静岡文化芸術大学・文化芸術研究センター教授。『プロアスター教史』(刀水書房)、『マニ教』(講談社選書メチエ)、『古代オリエントの宗教』(講談社現代新書)など著書多数。